
我は誓う、剣に友に

十海 with いーぐる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

我は誓う、剣に友に

【Nコード】

N 8 5 4 3 Z

【作者名】

十海 with いーぐる

【あらすじ】

人間族の若者グレンは幼い頃、崩れた崖で錆びた剣を手に入れた。初めて見るはずなのに、何故だかひどく懐かしく、いつも背中に背負って大事に持ち歩いた。月日が流れ、一人前の鍛冶職人に成長したグレンは自らの手で剣を鍛え直す。のみならず、己の剣に名を与え、魂を分かť『絆の誓い』の儀式を行おうとしていた。時を同じくして闇の中、平和な村を屍闇に染めようと、不気味に蠢く影が迫りつつあった……これは、英雄の魂を宿した『普通に生きる』人々の物語。 本作は、新紀元社より刊行されたTRPG「バルナ・

クロニカ」及びサプリメント「ナジャ・イストリカ」（著：小林正親）の世界観とシステムをベースに作成しました。登場するキャラクターは、いずれもバルナ・クロニカのルールに基づき作成したものです。世界の成り立ちや神話、仕組みなどは作中できちんと説明し、元となったTRPGをご存知ない方でも、普通にファンタジー小説としてお楽しみいただけるよう心を砕きました。色褪せた大地を踏みしめて、鮮やかに今を『生きる』人々の織りなす、骨太な物語をご賞味ください。

序章（前書き）

・ 作中におけるルールの解釈、適用はあくまで個人の解釈によるものです。

・ くれぐれもこの件について、新紀元社および著作者の小林さんに問い合わせる事はお控えください。

序章

遙かな昔。

虚空を渡る始祖たる風が、想いえがいて形をつくり、六柱の聖霊が生まれた。

聖霊たちもまた想い、えがいて形をつくり、ルラーラ現界とそこに住まう命を創った。

しかし。

現界の住民は自らの守護者たる光の聖霊に反旗を翻し、それ故光の聖霊は悲しみとともに彼らを光の槍で貫いた。

この時から現界には、心魂の欠けた四つの種族と何も失わなかった一つの種族、そして屍闇の王が存在する事となる。

賢明さを失った戦人族。ドウォルグ
エルフィン

希望を失った長命族。オウガ・アザレラ

鬼面族は生まれながら愛を知らず、勇気を失った笛小人族は自らの影をも恐れて逃げ惑う。コックス

だが唯一、人間族だけは何も失わず、故に他の種族から嫉まれる運命となる。ザハール

ザハールが失ったのは、『信頼』と言う絆なのかも知れない。

ナジャ希望の灯火。

遠い昔、生きとして生ける者全てを屍闇の王から守るため、自ら輪舞に身を投じた勇氣ある者たち。この世に屍闇の王が再臨した時、彼らもまた、生まれ変わる。

その身に光の聖霊より授かりし証？？シエン刻印を抱いて。

彼らの中には、自らが信じ、命を預ける己の武器に名を付け、永遠の絆を誓った者たちがいる。剣、斧、弓、あるいは槍、そして盾絆を誓い、武器の内に眠る心魂^{バルナ}を呼び覚ました者たちは誓い^{ジエンギール}し者と呼ばれた。

誓いし者を失った時、心魂目覚めし武器は眠りにつき、ただのモノに戻ると言う。

眠れる武器と転生の英雄。

もしも、再び彼らが出会ったら？

最後の屍闇の王の出現より既に1200年。

不屍の魔物と妖鬼の恐怖は記憶の底に沈み、希望の灯火の存在もおとぎ話に名残を留めるのみとなった今……。

答えを知る者は、まだいない。

【1】夜に走る

男が走っていた。

まだ夜も明け切らぬ荒野を、葉っぱの尖ったの、丸いの、蔓巻くの……腰の高さまで伸び茂った、堅い草をかき分けて。亜麻色の髪は汗に濡れて額にへばりつき、うっすら無精ヒゲに覆われた口元は引きつった笑みの形に固まっている。

男は必死で走っていた。

夜露に湿った草がまとわりつき、今にももつれそうな足を更に鈍らせる。必死で走っているのに、なかなか体が前に進まない。さながら、寝苦しい夜の悪い夢。

だが、現実だ。

皮膚を伝う冷たい汗の玉も。ぜいぜいと耳奥で轟く息の音も。渴いて張り付く咽の奥、冷えた息は胸の奥に刺さり痛む。そして……腕の中で暴れる小さな生き物一人。

「イーーーーーヤアアアアア！」

白目のほとんどないすみれ色の瞳、兎を思わせる鼻面の尖った愛くるしい顔。長く編み垂らしたトウモロコシ色のお下げが、ぶんぶんぶんと派手に揺れる。

「落ち着け、落ち着けつつのネイネイ、こら、暴れるなっ」
「イーーーーーヤアアアアア！ 怖い、怖い、怖いーっ」

「トクン」

笛小人族の娘は完全に取り乱していた。普段からは信じられないような力で暴れ、手足を突っ張る。

予測不能の動きでびくん、びくんと強烈に揺さぶられ、ちよつとでも気を抜いたら最後、手からすぽんつと飛び出しそうだ。それはすなわち、今の状況下では彼女の死を意味する。

横ざまに揺さぶる動きは自ずと前に進む妨げとなり、走る速度を鈍らせる。

元々腕力に自信のある方ではない。加えて、四十路を超えた身にはきつい仕事だ。一足前に蹴り出すことに体の節々がきしみ、骨が、肉が悲鳴を挙げる。

「ちくしょう、このままじゃあつ」

ざ、ざざ、ざあ……。

生ぬるい風が吹き抜け、腐肉の匂いが一段と濃くなった。

来る。草をかき分け、追っ手が迫ってくる。息も乱さず、着実にこちらら生身の人間だが、あいにくと向こうは切れる息も、痛む心臓も持ち合わせちゃいないと来てる。初手から分の悪い追いかけて。だが、降りるつもりはさらさらない。

それでも苦し紛れに悪態の一つ二つは吐きたくもなる。

「あー、もう。何で俺、こんなことしてるんだろつなあ……」

ほんの数時間前、男は雪姫川を下る川船に乗っていた。

【2】川を下りて

エルプリンツェザ・イバイ

雪姫川のほとりの色合いは、幅10ルット（30m）ほどの水を挟んで南と北で、すばつと二つに分かれている。

南岸は幾本もの水路が引かれ、拓かれ、耕され、ふっさりと伸びた麦と稲が穂を揺らす。風が吹くたびにさやさや、ざあつとしなやかな、青い波が走り抜ける

カンタアリ・ガーラ

片や北岸には人の手はほとんど入っておらず、残歌の戦い以来の手付かずの荒れ地が広がっている。茫々と生え広がる丈の高い草と絡み合う木々の枝葉が褪せた緑の壁となり、水際近くまで押し寄せていた。

この地の開拓が始まって40余年、村も人も増えた。しかしながら、エマン・エルム大荒野は依然として人が生きるのに容易い土地ではないのだ。

船が下るにつれて、川岸に刻まれた人の痕跡は徐々に濃くなり密になり、草を食む牛の姿がぼつぼつと増え始める。

ほどなく、行く手にアンヘイルダールの『北の見張り塔』が見えてきた。

ここを越えれば、もう村の中だ。

川舟の乗客たちが荷物をまとめ、降りる支度を始める。男は船底に置いたふた付きの籠を持ち上げ、ベルトを肩にかけた。

一抱えほどもある大きな四角い籠の中には、川上の山で採取した薬草が詰まっていた。

「よつこらせつと」

たかだか草と言っても、集まればけつこうな重さになる。思わず

知らずもらした掛け声に、我ながら年よりくさいと苦笑がにじむ。重ねた歳月に嘘は着けぬ。四十の坂を越えた頃から何かにつけ、がくつと段差を踏み抜いたような、体力の衰えを感じていた。

（こうして、季節ごとに薬草採りに出てこられるのも、あと何年かね……）

ゆらありと船が揺れる。決して激しくはなく、あくまでゆるやかな動きで。

流れが変わったのだ。

船は雪姫川と薄雪川エルル・ウガルテの合流点にさし掛かりつあった。

ふさふさと黒いヒゲを蓄えた船長は、巧みに流れを読み、舵を取り、船を棧橋へと寄せて行く。

程なくこつん、と木と木が触れ合い、振動が足下に伝わって来た。すかさず舳い綱が投げられる。待ちかまえた船着き場の人足が受け取り、杭へとくくり付けた。

渡し板なんて気の利いたものはここでは使わない。船べりを乗り越え、すたん、と棧橋へと降り立った。亜麻色の柔らかな髪が揺れる。すたすたと歩いて棧橋を渡り、岸へと向かう。ぐずぐずしていたら、荷下ろし荷積みの邪魔になる。

「つしよつと……」

どつしりと動かない大地を踏みしめ、男は大きくのびをした。体中の骨がぼきぼきと、小気味の良い音を立ててほぐれて行く。

彼は体の大きな……所謂、偉丈夫ではなかった。背は小さく、手足胸板足腰の肉付きは、がっちりと言うよりむしろ、むっちり。外見の語る通り腕っ節もさほど強くはない。

二重瞼のぱつちりした目元、顔にはほとんど皺らしい皺はなく、肌もつるりと滑らかで、顎を覆う無精ヒゲさえなければ少年と言っても通じるだろう。

だが、愛想笑いを絶やさぬ口元とは裏腹に、蜂蜜色の瞳は終始油断なく辺りを見回し、内側に宿る光は鋭い。

身のこなしは猫のようにしなやかで、それなりの場数を踏んで生き抜いて来たことを伺わせた。

この男、名をハーティアル・ジェムルと言う。通り名はハーツ、小さいながらも、サガルロンドの裏通りに店を構える薬草師だった。

エルルタンタからの帰り道、彼がわざわざ遠回りしてこのアンヘイルダールの村に立ち寄ったのには、理由があった。

一つはここがめつぼう食い物の美味い村であること。そしてもう一つは……。

「さあて、久しぶりにグレンの坊ンの顔でも拝みに行くかね？」

誰にともなくつぶやく刹那。懐の奥深くしまい込んだ小袋が、微かにしゃり……と鳴った。

【3】大鍋亭にて

船着き場を出て東に歩き、円形の広場へとさしかかる。

ここは南の門からの道と、船着き場からの道の出会っ場所。村で一番、賑やかな界限だ。

新鮮なバターをたつぷり乗せた蒸かしイモ、あぶった腸詰め、丸パン添え、魚のフライと揚げたイモ。所狭しと軒を連ねる屋台の前を通り過ぎ、まっすぐに『大鍋亭』へと入る。

ここはアンヘイルダールの唯一の居酒屋兼宿屋。ハーツが村を訪れる際の定宿であり、相棒との待ち合わせ場所だった。

『まずは鍋より始めよ』

店に入ると真っ先に、暖炉の上の壁に刻まれた碑文が目に入る。その言葉通り、奥の厨房では特別あつらえの巨大な鉄鍋がくつくと湯気を立てていた。

既に5の鐘が鳴り終わり、昼食の混雑は徐々に収まりつつある。だが、それでも店が賑わっていることに変わりはない。

空気がうねっていた。

人間、ドヴォルグ、エルフィン。体中くまなく衣服で覆い隠し、ザハール決して帽子を脱がない、仮面の奴ら……オウガ・アザレラ鬼面族。

それぞれが喋る言葉が異なる響きを奏で、ミツバチの羽音のさながらにわぁんと飛び交っている。

種族、性別、年齢。あらゆる色が入り交じり、使いさしの絵の具皿みたいな客席を見回していると……。

「お？」

カウンターの向こうから、とんがり帽子が近づいて来る。えっちらおっちら左右に揺れる帽子は、賑やかな幾何学模様で彩られていた。

「んっしょ、んっしょ……」

木の軋る音がする。どうやら、帽子の主は踏み台を上っているようだ。ほどなく、先端に毛房の生えた長い耳が。次いで鼻柱の低いとがった顔が、ひょこつとのぞいた。

トウモロコシ色の長いお下げ髪が揺れる。

「おまちどおつ、『今日の煮込み』と揚げパンの定食、あがったよー！」

「よっ、ネイネイ」

カウンターに歩み寄り、軽く手を掲げてご挨拶。

白目のほとんどない、愛くるしいスミレ色の瞳がこちらを見る。途端に、兎めいた顔に、ぱあっと極上の笑顔が花開く。

「おじさんっ、おじさんっ、薬草屋のおじさんっ！」

「元気そうだな」

「うん、すっごく元気！ 何食べる？ 今日も美味しいよ！」

「そーかそーか。修業がんばってるんだな！ 定食一つ頼むわ」

「りょーかい、定食一つねっ」

「それと……赤毛の鍛冶屋が来てると思うんだが」

ぴこぴこと、長い耳がゆれる。

「鍛冶屋さん。鍛冶屋さん、いるよ？ ほら、あそこ」

指さす方向を見れば、確かに。隅っこのテーブルに、がっちりした体格のザハールの若者が腰かけていた。鮮やかな赤毛を師匠に倣って長く伸ばし、端をきっちり三つ編みにした男が。

「おー、いたいた。ありがとな」

「どーいたまして！」

ネイネイは時々、音をいくつかすっ飛ばす。どうやら、人間族の言葉は、彼女の口の動きに追いつかないようなのだ。

幸い、赤毛の青年のテーブルには空席があつた。それとなく近づき、すくと真向かいの椅子に腰を降ろす。

「んあ？」

揚げパンにかぶりつく動きが途中で止まった。

「あいつかーらず、隅っこの好きな子だねえ」

んぐつと飲み込くだし、お茶でがぶがぶと流し込んでいる。

目を白黒させつつ、どうにか口の中のことを片づけると、赤毛の鍛冶屋は白い歯を見せ、顔が真っ二つに割れそうな勢いで笑みかけてきた。

「よう、ハーツ！」

「よう、グレンデール」

「だーっ、その名前で呼ぶなっつってんだろ？」

途端に口をひん曲げて、不満げに鼻を鳴らす。

「長いし。音、ひねって引っ張る感じがだらーっとして間抜けくさい」

「わかったよ、グレン」

「……ん」

それでいい、とばかりにうなずいている。まったく、こう言う所はいくつになっても子どもだ。可愛いやらおかしいやらでつい、顔を合わせるたびに同じやり取りを続けている。

知り合ってこの方6年、飽きもせず。サガルロンドの城壁の、漆黒に輝く『剣の門』。その傍らで出会ったあの日から、ずっと。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8543z/>

我は誓う、剣に友に

2011年12月28日12時47分発行